文芸プラザ

短編小説

遺物（下）

今井隆

それから数日が過ぎたころ、律子は真一の書斎に入った。机の上には、真一が狙っていた時代小説新人賞の応募原稿が置いてあった。確か、過去に二度ほど応募しているはずであったが、第一次選考を通過したこともなかった。真一は、取材旅行と称して古戦場や旧跡などを訪ねることが、年に三回ではきかなかった。酒もタバコもやらない真一の唯一の趣味だからと、律子は大目に見てきた。

真一は小説を書くために、パソコンのブラインドタッチを習得するほどの熱の入れようであった。しかし、天賦の素質が備わっていなかったのであろう、日の目を見るようなものはとても書けないだろうと律子は思っていた。いい作品が書けたからと喜んで、「お前は俺の第一読者だから、幸せものだよ」などと本気とも冗談ともつかないように言うことが時としてあった。律子にも少しは文学の心得があった。中学三年生で、すでに世界名作全集を読み終えていた。

「今度の作品は、この前のものよりずっといいんじゃない。人物がとても良く出ているわ」などと、取ってつけたような誉め言葉を添えたものだった。

夫の原稿を、律子はふと読んでみたくなった。時代小説にもかかわらず、真一にはかつての歴史の舞台が現在はどうなっているのかを描写する妙な癖があった。落ち着いたら、夫のたどった旧跡巡りをするのも悪くはないと思う。

律子の気がかりは、遺書らしいものが見当たらなかったことである。時々電話をかけてくる泰弘の話によると、一九九九年に三万三千人ほどだった自殺者は、昨年、二〇〇二年には推定で五万人になるという。

「その何倍かの家族が、悲しんでさ、苦しんでいるんだから……、そして何とか立ち直ろうとしているんだから、お袋も負けるんじゃないよ」と泰弘は付け加えた。

自殺者のうち、どれだけの人間が遺書をしたためるのか、律子には思いもよらない。夫の自殺の原因を知りたいという反面、それが自分に関わることかもしれないという心配がないわけではない。

風に涼しさが感じられる季節になって、律子は夫の所持品の整理を始めていた。

夫が遺した三ケースほどのフロッピーの収納容器から一枚ずつフロッピーを取り出して、律子は内容を確認していった。今までの応募作品を納めたフロッピーが多かったが、会社の損益計算書の複写や真一の日記もあったりして、律子は興味をそそられもし不意に悲しみが込み上げてきた。

律子は次々と単純な作業を繰り返した。「夢交信」と書いてある一枚のフロッピーがあった。夢交信、と律子はつぶやき、ドライバーに入れた。最初律子は、時代小説にしては変わった題名をつけたものだと思っていた。

「知代さん、こんにちは。さっき会ったばかりなのに、なんだか会いたくてたまりません。確か、過去に二度ほど応募しているはずであったが、第一次選考を通過したこともなかった。真一は、取材旅行と称して古戦場や旧跡などを訪ねることが、年に三回ではきかなかった。酒もタバコもやらない真一の唯一の趣味だからと、律子は大目に見てきた。

真一は小説を書くために、パソコンのブラインドタッチを習得するほどの熱の入れようであった。しかし、天賦の素質が備わっていなかったのであろう、日の目を見るようなものはとても書けないだろうと律子は思っていた。いい作品が書けたからと喜んで、「お前は俺の第一読者だから、幸せものだよ」などと本気とも冗談ともつかないように言うことが時としてあった。律子にも少しは文学の心得があった。中学三年生で、すでに世界名作全集を読み終えていた。

「今度の作品は、この前のものよりずっといいんじゃない。人物がとても良く出ているわ」などと、取ってつけたような誉め言葉を添えたものだった。

夫の原稿を、律子はふと読んでみたくなった。時代小説にもかかわらず、真一にはかつての歴史の舞台が現在はどうなっているのかを描写する妙な癖があった。落ち着いたら、夫のたどった旧跡巡りをするのも悪くはないと思う。

律子の気がかりは、遺書らしいものが見当たらなかったことである。時々電話をかけてくる泰弘の話によると、一九九九年に三万三千人ほどだった自殺者は、昨年、二〇〇二年には推定で五万人になるという。

「その何倍かの家族が、悲しんでさ、苦しんでいるんだから……、そして何とか立ち直ろうとしているんだから、お袋も負けるんじゃないよ」と泰弘は付け加えた。

自殺者のうち、どれだけの人間が遺書をしたためるのか、律子には思いもよらない。夫の自殺の原因を知りたいという反面、それが自分に関わることかもしれないという心配がないわけではない。

風に涼しさが感じられる季節になって、律子は夫の所持品の整理を始めていた。

夫が遺した三ケースほどのフロッピーの収納容器から一枚ずつフロッピーを取り出して、律子は内容を確認していった。今までの応募作品を納めたフロッピーが多かったが、会社の損益計算書の複写や真一の日記もあったりして、律子は興味をそそられもし不意に悲しみが込み上げてきた。

律子は次々と単純な作業を繰り返した。「夢交信」と書いてある一枚のフロッピーがあった。夢交信、と律子はつぶやき、ドライバーに入れた。最初律子は、時代小説にしては

いまい・たかし　昭和30年、岐阜県益田郡（現下呂市）萩原町に生まれる。農林水産省に勤務するかたわら、30歳ぐらいから小説、詩、ルポなどを書き始める。文芸同人誌「麦夢」主宰。短編で「岐阜市文芸祭賞」受賞。平成12年に水稲新品種「龍の瞳」を発見して育成。19、20年と、お米の食味コンクールで日本一に輝く。現在は、（資）龍の瞳の代表を務めながら、森の再生などを夢見る。

でも、今の気持ちは少し違います。うまく伝えられないのですが……。これからのことはあまり構えたり、あれこれと考えたりせずに、今日の取材旅行は最高でした。あなたと会ってから数回なのに、友人以上の関係になってしまったことが未だに信じられません。関ケ原古戦場にあったベンチの上で、知代さんからもらった僕への誕生プレゼント。僕は嬉しくて思わず、おれにキスしてもいいですかと言い、君は目を見開いて驚き真っ赤に目を閉じましたね。僕のあの時の気持ちをどう表現すればいいのか、かーっと血が煮えたぎるように駆き、心臓の鼓動が高まり……いやそんな月並みな言葉じゃ何も言っていないに等しいでしょうね。あなたの唇はとても柔らかく、確実にとろけていく自分を感じたのです。田んぼ」囲まれたあの場所に、農婦でもいたならばキスをするなどということは起こらなかった。あの時、突然の風が起こらなかったら、ふわついた気分にならなかったかもしれない。

一瞬の風の中に、多くの人の命が散った瞬間があって……数え切れないドラマがあるんですね。人間ってすごいですね。あなたから教えられたメールアドレスにちゃんと届きますように。次ぎの待ち合わせ場所と時間だけが二人の接点だった。それ以外のことは住所も、電話番号もお互いに秘密だった関係から抜け出て、メールでのやり取りが始まったんですね。またあなたとの記念すべき日が増えました。

今日は筆が進みそうもありません。ありがとう。　真一」

夫にしては珍しく恋愛小説なのかなと思っているうちに、「真一」と書いてあったので妙な予感に襲われた。

「真一さん、私の方からメールを差し上げるべきだったのに、こんな時間になってしまって……ごめんなさい。新幹線の時間がなかったので随分と心配しましたが、六時時半には帰宅できました。使い古した雑巾のような夫は、いつも七時過ぎに帰ってきますから、食事の準備やら家の整頓やらでおおわらわでした。今、ほっとしているところです。夫は、お酒を飲んでもう寝ています。

まさか、伊吹山の山頂までドライブに連れていってもらえるなんて思いませんでした。伊吹山から見下ろす山並みは絶景だったし、古代から中世にかけて歴史の舞台に多く登場する美濃平野を眺望することもでき感動の連続でした。家に帰ってからも、自所に立ちながらいろいろと思い出していました。

さて、関ヶ原でのあの瞬間まで、真一さんのことを小説を書く仲間だと思っていました。

数人の男性から結婚の申し込みがあったし、それなりに恋もしてきた。が、早と女の感情の峰が重ならなかった。結婚なんて偶然の産物なのだ、と律子は今にして思う。男と女が一つ屋根の下で暮らしてきた。泰弘という名の子どもを作り、そして一人前になるまで育てた。その子は、経済的にも一人の人間としても独立して生きている。二人だけの人生の出発点に立った矢先に遇されてしまった。

「もう、これ以上苦しむことは僕にはできそうもありません。新聞を読んでいる妻の横顔を見て、背徳の情が突然湧き上がって来たりします。これでも古風な人間なのです。

しかし、和代さんのことをすでに愛してしまったことも本当のことです。生きているのがこんなに辛いものとは、今まで経験したことがありません……。」という文言が律子の耳中に広がって、落ち着きどころを求めて浮遊している。

真一に応えて、女からの文章が綴く。「あなたを失いたくないです。あなたの笑顔にこれだけ励まされてきたことでしょう。いつもあなたの心に触れていたい。女としての私が、そう感じたのです。死ぬなんてことはおっしゃらないで下さい。たった一度の人生です。私にとって、あなたのいない人生なんて、とても考えられない……。私を悲しませないで、困らせないで……。　和代」

家は真っ暗であった。豆電球でもつけておけば良かった、と小さなことに腹が立った。律子は台所に行き、二人の結婚二十周年にと買い求めていたドイツワインのコルク栓を抜いた。とくとく、とくとくと小気味良い音が響いた。二つ目のグラスにも注ぎ、律子はグラスを持って心で「乾杯」と言った。グラスを合わせる乾いた音がした。

ワインを一気に飲み干してから、律子はおもむろに側にあった広告の紙を取った。酔いが急に回ってきたようだった。律子はボールペンをしっかりと握り締め、カタカタと音を立てて書き始めた。

「和代様　あなたからのメールがこんなにたくさん溜まっていることに驚いています。実は階段から転げ落ちてしまい、左足大腿部を骨折してしまったのです。直ぐに救急車で病院に運ばれるという体たらくを演じてしまいました。場所が場所なので治りが遅く、無為な時間をいたずらに重ねてしまいました。という訳がありましたのでなかなかあなたに返信を出そうにもままならなかったわけです。お許しください。」

いったん筆を置いて、「泰弘に電話して、メールのやり方を習おうかな」と、律子は独り言を言った。

そして、なぜ自分がこんなことをしているのかと考えた。不可解な行動にも、また荒唐無稽なことのようにも思えてきた。

ふと、先ほどの風景が律子の中に蘇った。夫がなぜ死ななくてはならなかったのか、それがまだ律子の中で明らかになっていない。それを自分の下にさらさなければ一人で築いてきたはずの人生が無になってしまう気がした。

真一に成り代わって自分がメールをしていることが、いずれは和代にはばれる運いない。律子はその時のことを想像し、殺げやりな笑い声を上げた。

（了）